

令和5年度 奈良市立京西保育園 研究実践概要

園長名 近藤 美子
全園児数 137名

1. 研究主題

おもしろそう やってみよう またしたい環境づくり
～主体的にいきいきと遊ぶ子どもをめざして～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

昨年度まで取り組んできた体づくりでは、育ってほしい力と年齢や興味に合った体を動かす遊びを多角的に出し合い、捉えて実践していく研究を継続してきた。子ども自ら興味や意欲を持ち、遊びを楽しむことで豊かな心と体を育んでいきたいという願いをもって取り組みを進めてきたが、主体性を育む遊びには、体を動かす遊びの他にも多種の遊びがあるので、職員間で模索し検討する。

今年度は様々な遊びに視点を広げ、主体的に遊ぶ子どもを育むための環境について探るという新たな研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・いきいきと生活する子どもの姿を読み取り、子どもが主体的に遊ぶことができるよう、物的環境や人的環境を整えていく。
- ・日々の保育実践を振り返り、事例検証を通して、子どもの視点に立ち、心の動きや姿を捉える視点を明確にする。

②研究の重点

子どもの遊びの姿から、心（気持ちの動き）とそれを支えている環境の要因は何であるかを見取り考察することで、主体的に遊ぶことができる環境構成に活かしていく。

③活動の方法

子どもが『おもしろそう やってみよう またしたい』と感じる遊びとはどんなものか、また、その心情を生み出す環境にはどのような要因が含まれるのか、昨年度まで研究の重点として捉えてきた「心の動き」と「環境とのつながり」の2点の項目を継続したシートを作成し、遊び込む子どもの姿を見取り、保育の振り返りや考察をしながら記録を重ねていく。

毎月の会議の中で記録し振り返りシートを持ち寄り、学年ごとに取り上げた遊びの中の子どもの姿を出し合いながら子どもの心情や意欲、また、その遊びで子どもの育ちの支えとなっている環境、保育者の関わりや援助を振り返り、保育に活かせるよう協議を重ねていった。また、3・4・5歳児は幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿のうち、どの力の育ちに結びついているのか、振り返り検証する欄をつくる。

【0歳児エピソード】

定期的に様々な運動遊びへの取り組みを行い、遊びの内容や環境設定、子どもの姿を保育

者間で振り返りながら、次月へと繋げていくようにした。また事例やドキュメントから遊びの姿を省察し、体の動きや心の変容に視点を当てながら職員間で共有し、発達の繋がりや各年齢間の連携がもてるように話し合いや情報交換をしながら進めていった。

室内に大型マットや滑り台トンネルなどの運動遊具を設置し、四つ這いや低い姿勢を保持しながらで全身を使う動きを経験できる遊びの環境設定を意識して行ってきた。また、起伏のある道や階段など様々な場所を歩いたり、よじ登ったり、這ったりと全身を使って動くことで四肢コントロールなどの運動機能の発達を促してきた。

園庭に出ると築山に興味をもち、四つ這いや保育者の手を握ったりしながら自分でバランスをとって登ったり、降りたりするなど、体の運動機能の育ちが感じられた。

【1歳児エピソード】

春からリズム室でのサーキット遊び(巧技台・はしご・一本橋など)を継続的に取り入れてきた。

サーキット遊びでは普段の生活の中では経験しにくい動きを意識して遊具を設定した、最初は保育者が楽しんでいる姿を見せ「やってみようかな?」と興味をもてるようにしたり、高さを低くして「できた」の経験を積み重ねたりしてきた。

大型マットでは不安定なマットの上を歩くことでバランス感覚や体幹を養うことができ、また山型にすることで踏ん張る、よじ登るなど指先や足裏をしっかりと使うことができた、そんな動きを経験してほしい思いからサーキットの中央に大型マットを配置し、どこで遊んでいても常に見えるようにした。

子どもの成長に合わせ、その都度挑戦しやすくし、できたことで「できた」「おもしろい」「もう一回、やってみよう」と思えるように用具の高さや長さなどを工夫して、楽しめるようにしていった。できた時、嬉しい笑顔も見られた。

この遊びを経験することで階段の上り下りもスムーズになり、戸外でのサーキット遊びも楽しむ姿が見られた。

【2歳児エピソード】

体を動かす楽しさを感じてほしいと思い、前年度から継続してサーキット遊びを取り入れてきた。園庭では、はしごを四つ這いで登る、下りるなどの動きが出来るように高低差をつけ一本橋や巧技台を組み合わせて子どもの姿に合わせて設置方法を変えてきた。

また、どれだけ跳んだかを見てわかるようにマットに動物の絵を貼る事で、「ここまで跳べたよ」と達成感や満足感を味わい「みてて!ほらとべたよ」と保育者に伝えようとする姿も見られた。

子どもの成長発達、興味に合わせて構成を変えてきたことで、意欲的に「やってみよう!」と挑戦する姿が見られた。また、「やった」「出来た」の気持ちに共感してもらうことで自信に繋がり、またしてみようと繰り返し楽しむことができるようになったと思う。その中で少しずつ友達との関りも増え、友達がしている姿に刺激を受けて「一緒にやりたい!」「できるようにになりたい!」と心の成長もみられた。

【3歳児エピソード】

園庭の草花を使って遊べる環境をつくった。コーナーには、園庭の草花を摘んで用意し、すり鉢や水のタンク、カップなどを用意しておいた。初めての遊びなので、保育者が一緒に遊びながらやり方を伝えていった。黄色や赤、紫色などの色水ができるとても喜び「もっ

とつくりたい」と毎日繰り返し遊ぶ姿が見られるようになった。「できたものを残しておきたい」「友達に見せたい」という気持ちにこたえられるように、小さなペットボトルと、移し替えるのに必要なロウトを用意しておいた。「素敵な色のジュースができたね」「何ジュース？」と思いに関心したり問いかけたりすると「ぶどうジュースなの」と嬉しそうに答えた。

3歳児は、色々な遊びを経験することで、自分のやりたい遊びや思いを表現していけるようになるのではいかと考え、遊びたい、やってみたいと思える環境を一つのコーナーとしてつくった。子ども達は遊びに興味をもち、おもしろそう、やってみようという意欲に繋がり、毎日継続して楽しめることができたのではないかと考える。

【4歳児エピソード】

身近な素材を使ってつくることが大好きな子ども達は、たこ焼き、寿司、ピザなど色々なお店屋さんを自分達で考え、店員役と客役を交代しながら遊んでいる。ある日、3歳児の友達を招待することになり、手づくりの財布カバンとお金をプレゼントした。当日は「いらっしゃいませー」と大きな声で声掛けをしたり、少し困っている姿を見ると「お金カバンに入っているよ」とカバンからお金を出す様子を見守ったり優しい姿が見られた。最後は「ありがとうございましたーまたどうぞきてくださーい」と役になりきった満足感を笑顔いっぱい見せていた。その後も第二弾・第三弾とお店をオープンする。

一年間、子ども達がつくったり描いたりする活動の中で、自分なりにのびのびと表現する姿を大切にしてきた。その中で考えたり工夫したりしながら少しずつ素材の特性や使い方を知る姿が見られた。失敗や成功体験を積み重ねながらできたときの喜びや満足感を感じ、自信へと繋がってきたと感じられる。子ども達の間で次第に友達の作品を見て、互いの良さに気づき認め合う姿が見られるようになった。

【5歳児エピソード】

『試合するで、集まって！』

10月末にプロ選手からバレーボールを教わったことをきっかけに、その日の夕方、保育者がボール遊びに誘うと園庭でバレーボールの遊びが始まった。翌日からはスポーツが好きなA児を中心に、仲の良いB児とC児が集まり、保育者を誘ってレシーブの練習に取り組んでいた。毎日保育者と一緒に体を動かしながら少しずつ上達していく喜びを感じる中で、次第に子ども達だけでもレシーブの練習や、レシーブが繋がってのパス回しができるようになった。

1月にA児とB児がバレーボールのパス回しをする中で、優しい力加減でレシーブをすると友達が受け取りやすいことやパスが何度も繋がることに気付いて喜んでいて。連続してパスができるようになってくると、バレーボールの試合をしたいという声が出たため、保育者が子どもの思いを認め、コートに白線を描くと何が始まるのかと子ども達が複数人集まってきた。3人程のチームで点数を競ううちに、試合のルールを子ども達で決めようとする姿があった。相談したルールを保育者がホワイトボードに書いてコートにそばに置いたり、新しいメンバーが加わったタイミングでルールを確認したりすることでメンバー全員がルールを把握し、主体的に取り組む姿へと繋がった。また、自分達で遊びを進め、より楽しくしていきたいという主体性が、レシーブだけでなくサーブやアタックにも挑戦する姿や、点数表をつくり全員に分かりやすいようにと考えたり工夫したりする姿へと繋がっていった。

5. 研究の成果

- ・保育者は子ども達が新しいことに興味を示し意欲的に挑戦しようとしている時はさりげなく援助し、笑顔で声をかけたり、気持ちを受けとめたりする事で子どもが自分で出来た満足感や喜びを味わいながら安心して遊びに向かう姿に繋がっていく事が分かった。
- ・保育者が一緒に遊ぶ中で遊び方を伝えたり、楽しさやできた嬉しさに共感したりしていくことで、もっとやってみたいと思う気持ちをもつことができる。物的環境だけではなく、子どもの思いや発想に寄り添い、一緒に考えたり楽しんだりする人的環境も大切だと分かった。
- ・保育者が構成する環境には、子どもの興味を引くきっかけ作りと、子どもの姿や楽しんでいる事柄を細かく読み取り、次の言動を予測しながら今の遊びをより展開させるためのものがあると考えた。また、これらの環境づくりは、子どもの姿が次々と変化していくため継続的に行われるものであり、1つの遊びのコーナーや継続した遊びの中での環境の再構成が大切となることが分かった。
- ・遊びに参加する全員が分かりやすい環境が主体的に活動する子どもの姿と繋がっていることが分かった。

心（気持ちの動き）と環境という2つの視点から、いきいきと遊ぶ子どもを見取り理解をする中で、主体的に遊ぶ子どもの心情と、その要因となる環境（物的・人的）との結びつきが毎月の記録の中で明確になった。

主体性が育まれる土台となる環境や保育者の関わりを振り返りながら考察し、記録を継続することで、具体的な環境設定や保育の展開につながったり、明日への保育や次に活かすヒントが得られたりしたのではないかと思われる。

6. 今後の課題

毎月の振り返りシートで日々の保育を振り返り、その時の子どもの心の動きや姿を捉える視点を明確化することで、必要な環境構成が見えてきた。

主体的に遊ぶことができる環境につながっているかという省察や、得られたことが継続して保育環境の発展につながっているかという点を職員間で見直しながら環境を工夫してきた。

また、シートの活用の中で、環境づくりの中にも様々な手段や目的があり、細分化することで子どもの姿の読み取りを深めることができるという気付きがあった。来年度はこの項目を取り入れ、活かしていきたい。

毎月の会議の中で、子ども達が主体的にいきいきと遊べるようにするためには環境構成が大切であると職員間で共有ができた。遊びの中で子どもの姿や思いを考察し、子どもの視点から豊かな人的環境や物的環境を整えていけるように、今後も学びを深めていきたい。